基調講演　「白砂青松の公園―浜寺公園が紡いだ150年の歴史―」

　　大阪府特別顧問　橋爪紳也

ただいまご紹介いただきました橋爪です。

まずは浜寺公園150周年、誠におめでとうございます。この公園を寿ぐ日に、基調講演を担当させていただけるということを光栄に思っております。

浜寺に関してこれまで二冊の本、いくつかの論文で、公園あるいは周辺の開発の歴史などを紹介して参りました。堺市では歴史的な町並みの維持整備の検討について、委員を長く担当しております。また高石市でも浜寺界隈については、高師浜線を残そうと高石市役所とご一緒に様々な検討を進めてまいりました。東羽衣の駅が高架になり、その周辺整備についても、高石市役所と一緒に計画立案をさせていただいてきた経緯があります。

本日は浜寺公園の最初の状況、毎日新聞社と海水浴場の経営について、そして住宅地としての浜寺と高師浜の発展と戦後の話をさせていただければと思っております。

**１　松の浜寺**

そもそも江戸時代等々の浜寺・高師浜では、大阪湾に面して防潮林が人工的に植樹されました。松林が美しかったということでこのように絵図が残っており、名所として古くから認知されていました。

明治元年に新田開発をしたいという地権者が現れましたが、視察に来られていた大久保利通が浜寺の美しい風致は残すべきだと指示をされ、松林を残すことになりました。その後、大阪府が浜寺に公園を開設しました。

この「公園」という言葉は江戸時代までは一般には使われていませんでした。遊園や庭園はありましたが、「公の園」という意味で、明治維新政府が「公園」という言葉を使い始めました。明治6年に太政官布達第16号により、大阪・東京・京都などにある「人民輻輳の地」、「古来の勝区」、「名人の旧跡地」など従来からの群衆遊覧の場所を公園としたのが最初の公園の定義でした。例としては東京では浅草寺や寛永寺の境内、京都では八坂神社や清水寺、嵐山などが挙げられます。

社寺境内地は、古くから人々が集まる場所でした。その地を「永く万人偕楽の地」として確保するために府県が「公園」として定めたかたちです。「公園」ができたのは、150年前のこの制度からとなります。

ここでのポイントは、長い期間多くの人々が集まり行楽を楽しむ場所こそが公園だったということです。また寺院が公園とされているのは、明治政府が廃仏毀釈を進めるために上知令を出し、寺の境内地などを取り上げたことも背景にあります。この段階では自然環境保全や緑化という概念は、公園にはなかったと思われます。

その後、日本中各地で府県が公園を指定していきます。明治20年までに全国で80ヶ所ほど公園が指定されますが、大阪府下では明治６年に浜寺公園と住吉公園が最初に公園に指定されました。それから150年が経ちます。

浜寺公園は明治6年に開設されましたが、現在とは全く公園の概念が違っていました。公園の中の様々な場所を民間の方々の別荘や料理旅館等として賃借していました。特に明治21年に日本中でコレラが大流行した際は、健康のための保養施設が必要ということで、大阪の天保山と同様に、沸かした海水を浴びてコレラ発症者を長期療養する海浜院が浜寺公園内で開設されました。

公園開設当初の絵図ですが、公園の中にたくさんの建物が並んでいて、料理旅館の松川庵や一力楼の浜寺支店などが立ち並んでいる様子が描かれています。

その後、南海鉄道（現南海電鉄）が浜寺駅を開業し、鉄道が開通しました。また公園整備の中で、大久保利通が松を残したということを継承する惜松碑ができ、日露戦争後にはロシア兵俘虜収容所ができたりしました。

ここからは私の絵葉書コレクション（一部高石市から資料拝借）を元にエピソードを紹介していきます。この松の写真は、「羽衣の松」の写真です。いつから始まったか正確には分かりませんが公園の中にある立派な松に名前をつけることがなされ、有名なもので言うと「羽衣の松（現存していない）」があります。羽衣の天女伝説は江戸や明治時期にはまだなかったと聞いていますので、この「羽衣の松」を元に羽衣という地名ができたのだと思います。

これは浜寺公園の雪景色の絵葉書ですが、当時は四季折々の浜寺公園の景色を絵葉書として紹介していたようです。次は浜寺公園の中で一番有名な料理旅館で、大浜にあった一力楼の浜寺支店です。このような建物が海岸沿いの風景がよい地区に並んでいました。

**２　大阪毎日新聞と海水浴場経営**

大阪毎日新聞社は浜寺の海水浴場とともに甲子園の海水浴場の経営もしていましたが、創業期より社主として活躍されていた本山彦一が浜寺に住まいを持たれていたということもあり、浜寺海水浴場の経営に力を入れたようです。

紹介する絵図には、日本で初めての民間の航空路ができた大浜も描かれています。当時、水上飛行機が高松や徳島まで乗客を運んでいました。また阪神間での遊覧飛行も行われていました。大浜では水族館や料理旅館街などが先行して集積し、リゾートとして発展をしました。そのにぎわいが浜寺の方にも移ってきました。

多くの人が浜寺に足を運ぶようになりました。背景には鉄道会社の激しい競争が大きく関係しています。明治21年に阪堺鉄道が堺まで延伸を行い、明治30年には南海鉄道が堺〜佐野まで延伸し、浜寺駅が開業しました（明治40年に駅舎建替えとともに浜寺公園駅に改称）。

明治31年に南海鉄道が阪堺鉄道を買収し阪堺線となりました。明治45年には阪堺電気軌道が浜寺公園まで延伸し、翌年浜寺駅前駅が開業しました。

大正７年には南海鉄道が高師浜線を開通し、昭和４年には阪和電鉄が浜寺支線を開通させました。現在の阪和線となる阪和電鉄は、最初は京阪電鉄系だったのですが、戦時中に南海電鉄と合併し、戦後は国鉄となり、現在はJRとなっています。

この時に南海電鉄は毎日新聞と組んで海水浴場を経営し、阪和電鉄は朝日新聞と組んで海水浴場を経営しており、競合関係にありました。鉄道マニアの伝説では阪和電鉄の電車が着いたら南海は踏切を上げない嫌がらせをしたと言われているほど両社が激しく競争していたそうです。

これは昭和11年の南海沿線案内で大浜の潮湯場や飛行場が掲載されており、隣には浜寺駅前、キャラバシ、臨海学舎と助松まで海水浴場と海浜リゾートが並んでいたことが描かれています。もう少し南へ行くと、浜寺には地引網をする漁師の絵や浜寺テニスコートがあり、南海が力を入れていたリゾート地だったということが分かります。また中央には東洋で初めての農業博物館も描かれています。

この写真は当時の浜寺公園の入り口の風景、次に公園が整備されてできた音楽堂や浜寺公園内の遊園場の風景です。この遊園場の絵葉書にはお嫁さんが子どもと浜寺公園に来て、「余りに居心地がいいので家に帰りたくない。お母さんあとは家をよろしく。」というメッセージが書かれています。

明治30年に浜寺駅が開業した後、明治39年に海水浴場と現在の浜寺水練学校につながる海水練習所が開設されました。海水練習所が経営された背景には、大阪毎日新聞社社長の本山彦一の「日本は海に囲まれている国であるので、日本人は誰しもがきちんと泳げなくてはいけない」という思いがありました。これは水練学校の写真で、毎日新聞社のマークが入った水着を着ている方や当時の指導風景が見て取れます。

これは毎日新聞社の海水浴場の正門です。正門の上に毎日新聞社の社印が載っていますが、この頃、毎日新聞社が浜寺公園で様々なイベントを行っていました。例えば海岸にスクリーンを張って船から見る映画大会や、海水浴場で鎧武者行列パレードが行われたこともありました。日露戦争の開戦の花火で船を爆破するショーや、キャラメルの宣伝で日本中を飛び回っていた森永の飛行船が浜寺に来てキャラメル撒きが行われたこともありました。

またこの頃、海の上に様々な遊具や施設が作られました。例えばシーソーや滑り台、ブランコ、飛び込み台が挙げられます。これは高石市からお借りした資料ですが、飛び込み台から毎日新聞社の宣伝傘をさして海に飛び込むイベントもありました。

このように大阪府が浜寺公園を開設し、園内を別荘や料亭に貸与します。そして浜寺駅が開業し、大阪の都心から多くの方に来ていただくための事業として海水浴場や海水練習所が経営されました。また明治後半には浜寺石神診療所が開設され、浜寺阪濱倶楽部や浜寺公会堂も続いて開設され、ますます浜寺公園が充実していくこととなります。これは石神療養所の病室や動物を飼育している写真で、当時はこういった医療施設も公園内にありました。

大正になって海水練習所が浜寺水練学校に改称し、今のシンクロナイズドスイミングに継承されている団体演技が始まりました。昭和７年には本山彦一が作った富民協会がヨーロッパの最先端の農業博物館を見て、日本はこれから農業で産業を起こしていくべきだということで農業博物館を開設しました。そこで日本の農業に関心のある若者を集めて研修をしていました。これの設計を担当したのが戦後に高石町長となる中尾保という建築家で、農業博物館の設計者が後に高石の臨海コンビナート事業を推し進めていくこととなるのです。

当時は様々な企業等が浜寺公園内で園遊会を実施していました。農業博物館があるので学校等が遠足や修学旅行等で、浜寺まで農業の勉強をしにくることがよくあったようです。

毎日新聞社はテニスコートやキャンプ場も運営しており、特に外国人が家族連れで避暑のために浜寺公園を訪れていました。期間限定のテント村には村長がおり、独自の運営がなされていたそうです。次の写真は浜寺公園の中にあったお子様向けのプールだそうで、６歳以下の子どもはここで水浴びをしていたそうです。

次の写真は前述の農業博物館です。当時としては斬新で綺麗な建物になっております。中はこのように様々な農業の展示があります。本山彦一は新聞社の事業で南米のミイラなど古代の発掘調査を実施し、それを新聞記事で展開するということをしていたのですが、その本山彦一の世界の農業遺産や南米の考古的なコレクションもこの農業博物館に保存されていました。その後、行き場がなくなって、吹田の関西大学の方に保存されています。まとめると教育・勉強のために、日本中から多くの方が浜寺公園を訪れていました。

**３　住宅地としての浜寺／高師浜**

大正の後半から昭和にかけて大阪を中心に住宅地開発が始まります。最初は大阪市内の富裕層が別宅を芦屋の山の手などに作ります。大阪では天下茶屋や帝塚山、天王寺周辺が人気でしたが、阪神間だけではなく、南の風光明媚なところに富裕層が大きな屋敷を構えるようになりました。大正から昭和の初めにはサラリーマンも月払いで買える住宅地が各所にできてきます。

浜寺や高石の動向を紹介しましょう。先に申しましたように、公園の中には先行して住宅や料理旅館がありました。明治39年には公園の中に20戸から34戸ほどの別荘があったそうです。大正11年には公園の中の別荘の数は130戸余りに増加したと資料には出てきます。これと同時に周辺には住宅ができてきます。これは高石側にあった住宅です。当時はこういう大きな邸宅がありました

邸宅だけではなく、風光明媚な公園の近くに郊外住宅地を作る目的で、大正７年に浜寺土地株式会社が設立されます。大正8年には高師浜を開発する事業体である南海土地株式会社が設立されます。続いて、北浜寺土地株式会社や南浜寺土地株式会社が設立されました。当時「浜寺」という名前が郊外のリゾート土地として素晴らしいブランド力があったということが会社名からも見て取れます。

これは土地会社要覧という戦前の大阪郊外の住宅開発をした会社の経営資料です。浜寺土地の資料を見ると浜寺公園の横に南海線があり、その東側に住宅地を作ったことが分かります。今もこのあたりでは戦前の邸宅のような建物を見ることができます。

北浜寺土地は、諏訪ノ森と石津川の間のあたりで土地開発をしていました。浜寺周辺から少し離れますが浜寺という名前を使用していました。南浜寺土地は助松の駅前を開発していました。助松の辺りで浜寺という社名でいいのか悩ましいところです。

高師浜駅前の地元の方々が設立した南海土地は、夏の別荘地と大阪へ通勤する方が住む通常の住宅の両方を高師浜で開発していたことが資料からわかります。現在の高師浜の碁盤の目に整理された土地は、この大正の時期の土地会社が整理したものになります。南海土地は山川七左衛門・中谷喜右衛門など名望家が出資をして、住宅地を経営していました。

もう一つ、浜寺公園に近いキャラバシにユニークな住宅地が開発されます。他の住宅地はヨーロッパ風の建物が多いのですが、キャラバシはアメリカ風の住宅地を作るということで開発されました。そのためガーデンシティという名称の住宅地が作られました。大正12年にキャラバシ園の第一期分譲が始まり、高師浜の住宅地を作った山川七左衛門の弟、山川逸郎が中心に計画、開発をしました。

逸郎は当時、大阪で自動車修理工場を経営していました。モータリゼーションを予見した逸郎はアメリカに渡り、自動車の技術を学び日本に帰ってきます。アメリカ滞在中、逸郎は日本の暮らしとアメリカの暮らしの大きな違いを感じました。アメリカの住宅は素晴らしく、それを高師浜にも展開したいということで、大正8年に帰国して、大正12年にキャラバシ園の分譲を始めます。最初に自分の洋館を立て、そこをオフィスとして住宅地を作り上げたと聞いております。

逸郎はアメリカ風の噴水のある公園と上下水道をすべて完備し、歩車分離を行った宅地を開発します。そして一宅ごとに敷地100坪以上の地下室や暖房設備がある住宅を提供しました。

逸郎は当時このように語っています。「西洋家屋に住んでみると、日本家屋のような無駄と、だらしない事から脱し、すべてが規則正しく、秩序よく運ぶことで生活に余裕が生じる。」

ちょうど大阪でも、家の中の炊事や洗濯の労働をいかに合理的に便利にするのか、住宅改良の活動が様々にあったのですが、キャラバシでも逸郎のアイデアで独自に新しい住宅を作ろうという活動が始まります。

逸郎は当時の日本の生活を「けだし、現在、不便にして不経済な生活は、勿論、今日の文化生活に適せず、なかんずく非活動的にして、骨董的なる、我等日本人居住の古典的 、其住宅の如きは、非文化的生活を象徴するものにして我等日本人は、一日も早くかかる現状より脱却して、能率多き文化生活を営むことは、自他共、真剣に考慮すべきき問題である」と語っています。

ここまでをまとめると、浜寺界隈は新しい文化を取り入れて、最先端の生活を提示しているような場所であったということができると思います。過去、最先端の街であり、公園も大阪で最初の公園として素晴らしいアイデアが盛り込まれていた、その精神を次の世代にも伝えて行く必要があると思っています。

**４　戦後とこれからの展望**

浜寺公園は戦後、昭和20年にＧＨＱが接収し、占領軍の幹部の方々の高級住宅が建設されます。当時、大林組が戦後復興の業務を受託し、従来日本になかったような住宅地を作るのですが、大阪府所管の公園に戻った際にすべて撤去したと聞いております。

昭和36年に堺泉北臨海工業地帯の造成が着手されました。様々な関係者の尽力の元、昭和38年には浜寺プールが開設されます。当時の浜寺周辺の写真だと浜寺水路の空撮写真があります。浜寺水路を中心に、新しい道路や高石大橋が作られました。また周辺地区は工業地帯の間に緑地帯の道路があり、当時としては最先端のデザインだったのだろうと思います。

今日お話ししたように各時代で、時代の要請に応じて新しいことを踏まえてきたのが、浜寺公園及びその周辺地域の開発だったのだと私は思います。ぜひこの界隈に住まい、楽しみ、そして働いている我々が、浜寺地域は素晴らしいのだと、他の大阪エリアや全国にアピールしていくということができれば思っております。

以上、浜寺公園の150年の話を、45分で話せという無理難題で後半は急ぎましたが、私からの講演は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

（図版は橋爪紳也コレクション提供。※無断転載を禁じます。）